

## 『こんにちは、赤ちゃん』

明星学園 宮下 智

こ自分の妹が結婚して、赤ちゃんができる。そして自分は伯父さんになっていく。

そんな時、障害者である自分は、いったいどんな気持ちを抱くようになるのだろうか？また、障害者である自分は何を考えるのだろうか？

自閉症且つ知的障害であるY男さんにとって、二十二才の冬は大いなる試練の季節となったのであった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

なかなかY男さんの障害は厳しい。まずは自閉症の大きな障害特性である感覚障害。味覚はおそらく過敏、一番大好きなものがソースをかけない海老フライ、つまり味が無い。例えば、カップ焼きそば、彼は味付け無しで食べる。素焼きそばである。逆に味噌汁、カレーライスは嫌い。これはきつと味が濃いからだ。ハンバーグは水道で洗ってデミグラスソースの味を消してから食べる。一番好きな飲み物は、水とお茶。ジュース類は口にしない。理由は同じ。僕らのおそらく百倍以上の濃さで味を感じてしまう彼にとって、生まれて以来ずっと、食事は苦痛以外のなにもものでもなかったらと思う。

そして皮膚感覚。こちらもおそらく過敏だろう。風が吹き始めると真夏でも窓を閉めたがる。雨の降る日、屋外には出たがらない。シャワーは嫌い。おそらく雨やシャワーの水滴、水流の圧力が痛いからなのではないかと思われる。ひよっとしたら風も痛い？

そして、最も彼を困らせるのは、感情表出の困難性と言われる障害だ。いま自分がどんなことを感じているのかが解り難い。また、解ったとしても、それをどのように表現したらいいのかが解らない。つまり、伝え方が解らないのだ。あるいは、その伝え方に失敗してしまう。

例えば、心からやりたいと思っている時でも、答えは「ダメ～！おしまい～！」となってしまう彼の口。嬉しいはずのことで、「もう～！」と怒りながら、足を踏み鳴らしてしまう彼の体。彼にとっては本当に不本意のことだろう。

彼と知り合った頃、こんなことがあった。バツリと大型ホームエイド店で、一人で歩いている彼に会った。「こんにちは。お父さんやお母さんは？」宮下の話しかけに、彼は大きな声で「ダメ～！」と言いながら、早足でこちらを振り返りながら進んでいく。そこでついて行くと、その先にはしっかりとお父さんがいた。父のところまで案内しようとする彼の意志に反して、彼の口は「ダメ～！」と叫んでしまうのである。これが感情表出の困難性という障害である。世間的には『あまのじゃく』で片付けられてしまう。一事が万事こんな具合のコミュニケーションの彼である。周りの人間も傷つくだろうが、当の本人が、一番傷ついているだろうなんてことは、容易に想像できる。

そんな彼でも、工夫すれば、真っ直ぐなコミュニケーションが可能である。それは、今のところO×カード。彼は、視覚的な情報処理方法の助けがあれば、自分の想いを正確に伝達することができるのだ。

「もうダメ～！」「おしまい～！」と大声で叫びながら、時には職員をつねったり、叩いたりしながら、Oのカードを選ぶ彼がいる。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

妹さんの結婚が決まったことを伝えられたその直後の担当職員との外出で、いつものように大好きな海老フライの食事の後、彼はソワソワし始めた。いつも食事の後には、買い物という流れである。なんとなく予感のあった担当職員は「今日はなんの買い物かな？」なんて言いながら、彼の本心を探り始める。するとY男さん、だんだん怒りモードである。「もうダメ～！」「おしまい～！」と早足で歩きながら、足を踏み鳴らしている。そして、次は、妹の名前を大声で叫びながら、これも大声で「プレゼント！」。

いやいや、本人が一番困っているのですが、職員もこんな時は困ってしまいます。『怒り』の気持ちの方を応援していいのか、『プレゼント！』の気持ちの方を応援していいのか。瞬時で決めて対応していかなくてははいけませんから。

そこで、ちょっと探りを入れてみます。「いろいろ考えていることがあるのなら、無理して、今日、買わなくても

いいんじゃないの？」と。彼は、怒りながら、売り場をどんどん進んでいく。そして、贈り物コーナーで妹の名とともに「プレゼント！」と大声。指差した先には、とってもかわいい写真立て、星の形がガラスで装飾されている。

誰が思いつきますか？妹さんの結婚のプレゼントに写真立て。この選択のセンスの良さには、Y男さんのやさしさがいっぱい詰まっている気がして、胸が一杯になってしまう。彼はこの写真立てにどんな写真を入れてもらいたいと思っているのだろうか？

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

赤ちゃんが生まれ、そのおめでとうのプレゼントを買いに行く時も同じだった。

「ダメ～！」「おしまい～！」「もう～！」と叫びながら、彼は、青い靴下と肌着セットを指差して、購入した。肌着セットには、『贈り物に人気ナンバー1』というキャッチコピーが添えられていた。またしてもグッドチョイス、Y男さんの真骨頂である。気紛れに、気分次第にプレゼントの品を選んでいるのではないことは明白だ。ずっとプレゼントには何が良いのかを考え続けているからこそできる選択がここにある。

僕は、いつでも彼の口よりも行動を応援する。ここでは、「ダメ～！」と叫ぶ口を無視して、プレゼントコーナーへどんどん進み、プレゼントを怒りながらも指差している、その彼を応援するのである。

だって、不当に反対のことを叫んでしまう自分の口に、(おそらく、彼はこんなことはもうやめたいと、いつも思っているだろう)一番困ってしまっているのは、彼自身であり、さらに、その言葉の矛先が、一番自分を大切にしてくれる担当職員に向かうのであるから、心の奥ではきっと「ゴメンネ、ゴメンネ」と呟いているのに違いないと感じるからだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

いよいよ赤ちゃんが妹と実家に帰って来て、明日が帰省日でご対面というその日、彼は朝からイライラした。そして次第に大声が出て、そうしている間に、手が出て足が出てと、怒りは最高潮に達した。明日のご対面の用意は万全と考えていた職員集団には、全く彼がなんのことを伝えようとしてるのが解らなかった。

妹の結婚や赤ちゃんの出生、複雑な思いはあるものの、それを歓迎し、お祝いしたい気持ちのY男さんであることは十分わかっている。…？

そう言えばと…、結婚おめでとうの電話の相談の時、彼が何回か言っていた言葉、それが頭をかすめた。

その言葉は「ゴメンネ」。

「ダメ～！」「おしまい～！」の大声の合間に、時々「ゴメンネ」と呟く彼。それはきっと「お兄ちゃん、障害者でゴメンネ。お兄ちゃん自閉症でゴメンネ。お兄ちゃん、こんな大声を出す人でゴメンネ。お兄ちゃん、暴れちゃう人でゴメンネ。」ではないのか？だとすれば、明日のご対面の前に、彼の心に去来するものはいったい何なのか？…。

「Y男さん、赤ちゃん抱っこしたいんじゃない？させてくれるか、それが心配なんじゃない？」職員は尋ねた。尋ねた途端、彼の怒りは大爆発した。話していても埒が明かないと感じた職員は、近くにあった人形とタオルで、急ごしらえの赤ちゃんをセットし、「赤ちゃんを抱っこする練習をしてみようよ」と提案した。彼は怒りながらも、その人形を受け取り、居室に入ってドアを閉めた。そっと覗くと、やさしく人形を抱っこしている彼、そこで支援方法は決まった。すぐに母に電話である。ざっと現在までの状況を説明して、「お母さん、Y男さん、赤ちゃん抱っこしてもいいですねえ？」と職員が尋ねる。電話口にY男さんが座る。母が答える。「おかあさん、Yには抱っこしてもらいたいなあ、と思っていたのよ。そんなこと心配させてゴメンネ。前に言っておいてあげれば良かったのにね。お父さんだって、妹のKだって、Yには、抱っこしてもらいたいなあ、と思っているに決まっているじゃない。大事なお兄ちゃんだもの、障害があるなんて、そんなこと心配しなくていいのよ。きっと上手に抱っこできると思うよ。」彼の怒りと不安は、この母の言葉で、急速に消えて行った。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>